

科学の解釈学

野家啓一, ちくま学芸文庫 (2007)

- 012 私が目指そうとしているのは、「究極の真理」として聖化された科学的知識を頂点とする「知のヒエラルヒー」を解体することであり、そうした位階秩序を支えている「客観性の神話」を非神話化することである。これは同時に、科学哲学を「科学の婢」の地位から解放し、それに「科学的理性批判」という本来の哲学的課題を遂行させることにつながるであろう。
- 013 科学の制度化を契機に、科学的啓蒙の運動は大きく変質する。科学主義という翼賛的なイデオロギーに転化した。それを科学の神話化と呼び変えるならば、啓蒙の野蛮への転化、あるいは啓蒙の自己崩壊という啓蒙の弁証法のテーゼは、この場合にもよく当てはまると言わねばなるまい。少なくとも科学的啓蒙の運動は、この「啓蒙の弁証法」というアポリアをうちに抱え込んだまま、20世紀へと足を踏み入れたのである。
- [C] このアポリアを科学は本来は抱え込んでいない。自己批判と絶対の絶対的否定のゆえに。
□
- 015 ここで「解釈学」とはローティが示唆する意味で、すなわち近代哲学の支柱である「認識論」と「基礎づけ主義 (foundationalism)¹」とを否認する意志を象徴する言葉として理解されねばならない。
- [C] 無矛盾性は真理を意味しない。形式論理内でモデルを特定することはできない。同型性さえ保証されない。つまり基礎づけのない世界は根無し草である。認識も信念の正当化も基礎を必要とする。つまり解釈学的アプローチをこのように理解するかぎりそれは相対主義から自由ではありえない。結局生物学的基礎づけ主義しか意味のある方向はない。□

序章「科学の論理学」から「科学の解釈学」へ

- 019 論理実証主義は哲学の科学化」を目指す一つの思想運動でもあった。それは自然科学的知識を真正な知識 (エピステーメ) の正嫡として認知し、その基準を満たさない諸々の知識、とりわけ旧来の哲学的教説を形而上学ないしは無意味な命題として退け、さらに人文社会科学に対してはその方法を自然科学化」することを要求した。
- [C] ここでも科学についての理解の浅さが問題になる。客観性と批判精神を要求するところに何が問題があるか。□
- 020 科学の論理学が理論と観察とを二元的に峻別するところから出発したのに対し、科学の解釈学は「観察の論理的負荷性を強調する
- [C] 論理の経験あるいは観察負荷性を同じように強調すべきである。
- 021 一部の論理実証主義者は感覚与件+解釈という二段階知覚説に理論的根拠を求めた。観察命題が感覚与件命題に還元されてしまえば、そこに理論的前提が忍び込み干渉する余地はまっ

¹(Wikipedia)「ある信念」(belief)を正当化するための何らかの基礎を認めることができるかという問題を肯定するのが「基礎付け主義」である。実際に基礎として働くような信念は絶対確実からはほど遠く、あるいはたとえそれ自体で非常に確からしいという程度の基準がつかわれたとしても、基礎的信念自体が非常に無内容なトートロジーであって他の信念の基礎として働かない。こうして基礎づけ主義は時代遅れと見なされるようになり、近年では、基礎付け主義を放棄して整合説 (ある命題が真であるかどうかは、その命題と他の命題群との整合性によって決まるとする立場) を支持するものが勢力を持つようになってきた

たくないことになる。こうして科学理論から独立に同定することができ、その理論を検証ないし反証する資格をもつ純粹の観察事実が得られたわけである。

これに対してハンソンは、以上のような二段階知覚説を批判し、「理論負荷的観察」と言う一段階知覚説を対置する。解釈は見ることの中にすでに不可分に織り合わされている。観察の中には「としてみる (seeing as)」および「ことを見る (seeing that)」という解釈的契機が構造的に組みこまれているのであり、その意味で観察とは「理論を背負って見る」ことにほかならないのである。むしろ「感覚与件」とよばれるものこそ、われわれの知覚を事後的に説明するために捏造された理論的な抽象物に過ぎない。

[C] しかし、そうする理論が空中にあるように考えてはならない。理論あるいは理論を支えるメカニズムは世界のなかで進化したものであるから、理論にも観察あるいは経験負荷性を認めなくては片手落ちなのである。ここに根本的な問題がある。□

022 観察とは生の事実をあるがままに受動的に写し取るのではなく、逆に理論的枠組みに則って事実を解釈的に〈構成〉する能動的行為なのである。

[C] そうではあるが、能動的な解釈能力も進化の産物なのである。□

理論負荷性があれば観察で理論は倒せない。ハンソンはこれを背極的に肯定する。理論はそれを否定するような観察事実によって反証され、打ち倒されるのではなくそれと対置される別の理論によって取って代わられる、というのである。

[C] ここには社会学的事実と科学活動の混同が見られるようである。パラダイムの考えにもこの混同が反映しているだろう。□

024 科学の解釈学は科学的認識を一回的な歴史的・社会的文脈の中に置き直してその存立基盤をトータルに問題化する。

パラダイム論を初めとする「新科学哲学」の一連の議論は、認識者からの独立の自然を貫く客観的法則という観念そのものが、17世紀の科学革命によって胚胎した特異な知的態度に由来するものである事を明らかにした。すなわち、「近代科学」を支える数量的・要素論的自然観は、「西ヨーロッパ近代」という特殊歴史的・地理的な刻印を帯びた知的探究のパラダイムにほかならないのである。それゆえ、科学的認識の「価値中立性」という神話は、もはやそのままの形では維持することはできなくなる。

[C] ここには論理の飛躍がある。たとえ「客観的法則という観念そのものが、17世紀の科学革命によって胚胎した特異な知的態度に由来する」が事実であったとしても、それが直ちに「西ヨーロッパ近代」という特殊歴史的・地理的な刻印を帯びた知的探究のパラダイムにほかならない」ということにはならない。ある正しい観察(たとえば生物は細胞からなる)がたとえ19世紀ドイツでなされたとしてもそれは地理的歴史的に特異なパラダイムというわけではない。□

026 新科学哲学の戦略目標はむしろ「自然科学の人文社会科学化」にあるということが出来る。

[C] 劣等感の裏返しである。□

027 自然法則もまた地中に隠された宝のように〈発見〉されるのではなく、むしろ科学者の読解行為(研究活動)によって〈発明〉されるのだということである。同時に科学の解釈学は、科学的認識と言えども人間の表現行為の一所産であり、科学的真理の〈客観性〉と言われてき

たものが、科学者共同体の一般的合意に基礎を置く〈間主観性〉にほかならないことを明らかにしたのである。

[C] そうか、単純化に過ぎる。もちろん単なる発明ではない。□

フッサールの手になる自然科学的明証性の究極的根拠を生活世界の明証性に求める丹念な作業を危機論稿の中に見ることができる。

1 「科学の解釈学」の目指すもの

032 論理実証主義を起点とする英米の科学哲学は、危機に晒された現代数学および現代物理学の基礎づけという当面の大目標があったとはいえ、その活動は科学理論の形式的分析とその論理的再構成という一面的な問題に踟躕しすぎていたといわざるをえない。そこでは科学的知識が知識と等置され...

(ハーバーマスの定義) 科学主義 (Scientism) とは科学の自己自身への信頼を意味する。すなわちそれは、われわれは科学をもはや可能な認識の一つの形式として理解することはできず、認識を科学と同一視せねばならないとする確信のことである。

つまり論理実証主義の立場は科学主義的科学哲学と特徴付けうる

33 そこにおいては科学的知をもわれわれの総体的な知の布置の中に位置づけ、それを人間的諸活動の中に基づけることによって学問のあり方と方向とを領導するするというアリストテレス以来の本来的な学問論的問題意識は見失われていたと言わざるを得ない。

[C] 理性の上限を与えるものが数学である。それと同じような意味で科学は客観的認識の上限を与えるものだ、という立場を取っていいのではないか？ では、過去の科学主義はどこがいけなかったのか？

知、知、知、と言ってはいるがここで知とは何か？ 何かを知っているとはどういうことか？□

034 1960年代の文化革命の要素としてつぎのようなものが挙げられている：

チョムスキーによる言語理論の革新

様相論理学を背景とするクリプキらの「新指示理論」²

フランクフルト学派による既成マルクス主義への批判

現象学、解釈学のルネサンス

構造主義³

²cf 固有名の本質的意味: <http://swansong3478.web.fc2.com/000013tetugakumokuji.html> その14節に「意味そのものが客観的にあることはありえません。」とある。そうか、意味の基底は生物学的に hardwire されたものである。

³(mainly wiki) あらゆる現象に対して、その現象に潜在する構造を抽出し、その構造によって現象を理解し、場合によっては制御するための方法論。研究対象の構造を抽出する作業を行うためには、その構造を構成する要素を探り出さなければならない。構造とはその要素間の関係性を示すものである。現在、構造主義の祖とされるソシュール自身は構造という用語を用いておらず、自身の理論を言語学以外の分野に拡張することにも慎重であった。構造主義という用語が一般に膾炙するようになったのは、クロード・レヴィ＝ストロースが、このような方法論を人類学に応用し、文化人類学において婚姻体系の「構造」を群論で説明したのが嚆矢である。原則として要素還元主義を批判し、関係論的構造理解が為される。ソシュールが言語には差異しかないと言ったと伝えられているように、まず構造は一挙に、一つの要素が他のすべての要素との関係において初めて相互依存的に決定されるものとして与えられる。広く言語学や記号論に起源を持つ構造主義にとっての構造とは、単

デリダによるポスト構造主義⁴

クーンのパラダイムとファイヤーアークの知のアナーキズム」(新科学哲学 new philosophy of science)

これは科学の論理学から解釈学への転換と特徴付けられる。

- 035 科学の論理学の立場は科学理論を形式的演繹体系として捉えそれを一階述語論理を基礎に公理主義的に再構成する。公理的に再構成された理論言語はモデルを通して観察言語と結びつく。それは対応規則によりそれも科学理論の一部を形作る。解釈された理論命題が感圧命題から論理的に演繹可能ならそれは検証されたとされる。公理主義、検証主義、進歩主義(科学的知識の連続的累積的性格を認める)が基本的主張である。
- 037 新科学哲学では動態的歴史分析の立場を主張した。科学は永遠不変の認識成果ではなく、歴史的・社会的に拘束された認識活動であることを顕在化させた。知識社会学的観点の導入と言ってもいい。
- 038 これらは、科学の論理学が展開してきた完成した科学理論の内部構造を論理的に分析するお言う態度が切り捨てた諸要因を再評価し、その科学主義的偏向を批判する。
- 039 科学的認識の明証性の究極的基板である生活世界的経験の回復を要求すること、これが新科学理論の第一の論点である。第二は共時的でない歴史的解析である。第3の論点は客観的真理なるものが超越的あるいは超歴史的概念ではなく、あくまでも科学者共同体による間主観的構成の所産であることを顕在化したことである。現象学の間主観的還元を見よ。⁵
- 「自然科学の人文社会科学化」を実現することを目指している；自然科学の方法といえども兆歴史的な妥当性と価値中立的な客観性を持つものではなく、歴史的・社会的に制約された

に相互に関係をもつ要素からなる体系というだけでなく、顕在的な現象として何が可能であるかを規定する、必ずしも意識されているわけではない、潜在的な規定条件としての関係性を意味する。

ブルバキは代数的構造、順序的構造、位相的構造の三つを母構造と呼び、数学の公理化を進めた。古典的数学は代数とか幾何とか解析などのように、異質な事項の集合から成り立っていたが、ブルバキ学派は全数学を構造に従属させようとしたのであった。

いわゆる構造主義的生物学では「例えば、何を犬と呼ぶかは、犬の実体に対してではなく、人間側が世界を適当に区切った分節に対して与えているなどというが実際に恣意的ではないものを恣意的であるとみなしがちだ！生物を構造主義的に見ようということは、遺伝暗号系以外のさまざまなルールもまた恣意的に決まっていると考えようということである」(池田)

⁴1960年後半から1970年後半ごろまでにフランスで誕生した思想運動のアメリカの学会がつけた総称。明確な定義や体系は存在しない。構造主義、ポストモダンとそれぞれ関係があり啓蒙思想を否定する。コリン・デイヴィスは「ポスト構造主義者でなく厳密にはポスト現象学者とすべきである」と主張している。「記号学で示されるように言語は万能でなく万人に受け入れられているシニフィアンを再生産するときに限り意思疎通が可能である。すると言語の構造を破綻させることで言語から成り立っているイデオロギーは意味をなくす。」言ってみれば言霊信仰にも似た言語偏重主義が見られることに注意。

デリダによると人間が言葉(ロゴス)によって世界の全てを構造化できるという構造主義の発想も西欧形而上学から抜け出せておらず、構造主義によって形而上学を解体しようという試みもまた形而上学にすぎない。そこでデリダは脱構築を行い階層的な二項対立を批評する。

《脱構築》「静止的な構造を前提とし、それを想起的に発見しうる」というプラトン以来の哲学の伝統的ドグマに対して、「我々自身の哲学の営みそのものがつねに古い構造を破壊し新たな構造を生成している」とする、20世紀哲学の全体に及ぶ大きな潮流のこと。

⁵浜渦 辰二「他者と異文化 フッサール間主観性の現象学の側面」『哲学年報』(九州大学文学部紀要)第49輯(1990)。http://www.let.osaka-u.ac.jp/cpshama/gyouseki/tasha-ibunka.html

一定の認識関心 (Intresse) に導かれ媒介された行為であり、しかもそれは特定の時代の科学者共同体のコンセンサスに基礎を置く。科学の方法を科学者共同体が営む言語ゲームのルールと考えるならば、そのルールは明らかに規約的 (conventional) な性格をもち、しかもその妥当性は共同体の構成メンバーの間主観的合意に基づくものだと言わねばならない。

042 観察とは理論的枠組みに合わせて事実を積極的に選択し解釈し構成する行為なのである。理論は経験的観察を基盤にして形成されねばならないにもかかわらず、逆に観察は理論を前提し、それによって制約されているという一種の解釈学的循環の関係が成立していることは容易に認めることができるであろう。

[C] これは一見もっともで大人の意見のように聞こえるが本当に循環しているか? □

043 観察の理論負荷性についての一つの有力な批判に答えておこう。観察の理論負荷性は主張しても理論の観察負荷性を主張していないことに注意せねばならない。観察は理論に依存しているとしても理論は観察によって一義的に決まるわけではない (クワインの言う理論の決定不全性)。ベーコン流の素朴な帰納も成り立たない。

[C] ここにも循環論の誤認が影を落としているとみるべきであろう。 □

046 科学者はつねに一定の先行的了解あるいは先入見を持って自然に臨むのである。先入見は認識が科学的であるための不可欠の基盤なのだと言うべきだろう。

言ってみれば、この先行了解は科学的共同体の研究伝統を形作っているのであり、人はこの伝統に参与し帰属することによって自らを1個の科学者として馴化するのである。

[C] 正しい先入主を持った科学者がよい科学者である。ここ先行了解などは間主観的合意に基づいて決まるコンセンサスに基礎を置くとされていると理解すべきだろう。そうではなく生物学的基礎があるとみるべきである。しかし、そのような見方は超越論的であるとされている (後出)。 □

050 クーンの立場では「科学的真理」が各パラダイムに相対化され科学の歴史を真理に向かう漸進的接近の歴史と見る科学の論理学の立場での構図を根本的に揺るがす。

しかし、通約不可能性をあまりに額面通りに取るとパラダイムの比較さえ不可能になる。科学史叙述が不可能になる。

一つは、今のパラダイムの視点からする「解釈学的変形」の操作でその意味でわれわれはパラダイムを超越できない。こうした理解にかかわるアポリアを別決する作業こそ「科学の解釈学」に課せられた課題なのである。[ここで言っている解釈学はテキスト理論を中止にすえたガダマー、リクール以降の解釈学の新展開をさす (p100)]

今ひとつの課題はパラダイムは科学的認識のレベルで提起された概念なのでその意味基盤である生活世界的認識あるいは実践的状況との関係を問い直すことである。その過程で「生活世界のアプリオリ」あるいは「実践的状況の不変構造」といった形で通約可能な超越的視点を歴史過程の外に設定することなく通約不可能性を内部から相殺する地平を見いださうのではないかと考える。これは科学者共同体を圍繞する言語共同体の構造を間主観性のレベルで解明するという課題をわれわれに課するはずである。

[C] しかし哲学的 bootstrap はうまく行かないだろう。 □

- 053 新科学哲学の一連の議論は、認識主体から独立に自存する対象的自然を貫く、超歴史的に妥当する客観的自然法則という観念が、それ自体一つの歴史的所産であり、17世紀の科学革命以降に胚胎した知的態度であることを明らかにした。すなわち近代科学の基盤である数量的・要素論的自然把握は西欧近代という歴史的・地理的刻印を帯びた知的探究のパラダイムにほかならないのである。
[C] ほかならないかどうかと正しいか否かとは関係ない。□

II. 生活世界とパラダイム

- 058 現代において「科学と人間」という問題設定が意味をもちうるとすれば、それは「科学研究」および「科学的真理」の存立機制を裏づけている人間的諸活動にまで遡って解明し、その機能と限界を画定するというすぐれて「学問論的」な課題を遂行することにおいてでしかないであろう。
60年代以降の学問論的課題設定の中で、すぐれた哲学的指南力を発揮した議論を二つ挙げることができる。一つはフッサールの生活世界論を基軸にした、ガリレオに始まる数学的自然科学の根本的批判であり、今ひとつは「新科学哲学」による啓蒙主義的科学館の破砕である。これらの両論は科学的真理に関する「アプリオリズムの否定」さらには「科学理論の(人間的諸活動による)媒介構造の究明」という二点において曲通の志向を分かち持ちっておりその点において近代科学の在りかたそのものへの批判的視座を確保し得ていると考えられるからである。
- 060 近代科学的世界象の根底には、全自然(宇宙)を貫く人間の意志からは独立な法則性があり、そしてこの法則性は数学的に把握可能であり、物理量を変数とする微分方程式の形に書き表しうる、とする思想が存している。
- 063 ガリレオの踏み出した決定的な一步は「自然の数学化」ということに要約される。あらわれとしての自然の背後には厳然たる数学的秩序が存在するという確信であり、その秩序あるいは構造を定量的に法則化することを科学の本分と見る方法論的態度にほかならない。
- 064 数学的自然科学の方法が次第に「精密化」の度合いを高め、それが科学上の進歩と同一視されるとき、方法によって抽出された数学的構造こそが「真なる存在」とみなされ、われわれの感性的経験に与えられる具体的自然は逆に仮象の位置に退く。フッサール: 理念化された自然を学以前の直感的自然にすりかえることは、ガリレオとともに始まる。理念の衣あるいは数学的シンボルの衣による生活世界の隠蔽である。

それゆえフッサールは晩年の労作『危機』論稿の中で、近代科学が自らの真理性の根拠である生活世界を忘却し、逆に自己の方法によって操作可能な諸対象(物理量)のみを唯一のリアリティとして承認するこの姿勢をこそ批判したのである。

自然科学の明証の究極的根拠が生活世界の明証にあるという現象学的科学論のテーゼ

[C] 生活世界の明証性は掘り下げ方が足りない錯覚に過ぎない。その明証性はより基本的な生物学的メカニズムから来る。生活世界の確証は生物学的にはきわめて抽象的な概念それを

具体的であると感じるのが錯覚なのである。□

- 065 フッサールにおいて生活世界の概念はつねに二義性を持っている。一つは一切の科学的先入見を排除することによって得られるすべての科学的認識の究極の意味基盤としての生活世界であり、いわば近代科学的世界象を一つの特殊世界として相対化する基軸を与える方法論的概念あるいは指標としての生活世界である。だが、このような生活世界は理念化された生活世界であってわれわれが実際に生きている世界ではない。今ひとつは事実に歴史的な所与としての生活世界である。問われねばならないのはこの生活世界 I と II の関係および科学理論とのつながりである。
- 066 カー： 文化的世界と直接的経験の世界とはともに科学が存在する前提条件を構成する—中略—科学のレベルは第二あるいは文化的レベルの上に建てられた第三の層を構成するのである。
- 068 すでにフッサール自身が「理念化 Idealisierung」という手続きで示唆しているように、科学的諸概念は知覚的経験に一定の方法論的操作を加えることによってはじめて成立する。それゆえに科学理論が照合されるべき検証の基盤は、生の「知覚的事実」ではなく方法というスクリーンを通った科学的事実の法なのである。むろんこの科学的事実は、文化的諸事象の一部として生活世界 II に属していることは言うまでもない。
[C] 実は方法を通る前に厳しく「生」によって選別されているのであって、その後の選別はどっちに転んでもたいしたことではないのではなからうか。□
- [C] パラダイム論というのは理念としての「科学」と実際の institutionalized science をはきちがえているのではないか。□
- 072 [C] Newton と Einstein の質量とは異なった概念なのか。□
- 075 科学的事実とはパラダイムというスクリーンを通した日常的な知覚的事実からの「抜き描き」なのである。
[C] 本当は蒸留過程なのであり生物学的過程で得られたものへと文化的迷信的夾雑物を除いた本来の世界象に戻る過程と見るべきなのではないか。生物学で遊ぶのである。□
- 078 パラダイムは科学的事実を創り出しはするが、知覚的事実を創り出すことはできない。われわれはこの知覚的事実 (生活世界 I) を基盤とすることによって、異なった二つのパラダイムが比較できるのである。
- 081 真理が語られるべきは透明な神の視点からではなく、有限者の共通の合意によって制約された間主観的な対話の場においてなのである。その場を形成する共通の合意事項こそわれわれが「パラダイム」の名で呼んできたものにほかならない。

- 087 確かにガリレオに始まる近代物理学は実験を手段とする経験科学であり、その限りでは経験に基礎をおいている。しかし、生の経験あるいは無垢の事実が数学的記述を要求しているわけではない。斜面を転がる球体もリンゴの落下もともに質点の運動として数量的に記述できる幾何学的言語を採用することによって、それらは物理学の中に位置を要求しうる科学的経験あるいは科学的事実となったのである。
- 090 学問研究の対象である自然法則は、神によって創り出された真正な秩序ではなく、自然の中にアприオリに内在する客観的秩序だと考えられるに到ったのである。こうして近代科学の理念の世俗化の過程が啓蒙主義に由来するものであることは村上陽一郎によって明らかにされた。
- 093 近代科学からポスト近代科学への方向転換を「自然と書物」から「自然というテキスト」へという隠喩の置き換えを通して明らかにしたい。
最近のテキスト理論および解釈学の展開からの示唆:
読解行為は著者の意図の再構成といった極を持たない。一義的な正しい読解という理念もまた消滅せざるを得ない。
第二のテーゼはテキストの意味とは「テキストと読者との相互作用の産物であってテキストの中に隠されている特定のものではない。—中略—自然というテキストは著者(神)の意図にすべて還元できるようなアприオリな意味を内在させた自己完結的な書物ではなく、読者による可能な複数の解釈を許容する力動的で開かれた構造体なのである。
- 103 認識関心が科学的実践を主導する(ハーバーマス)
認識関心は読者をテキストの読解へと誘う最初の動機づけでありそれは読解の方向を先導的に規定するものなのである。
- 104 何「認識を主導する関心は、それによって画定される方法論的枠組みの内部ではじめて問題として出現しうるような類の問題設定を手引きとして規定されてはならない... 認識を主導する関心は、客観的に設定された生の維持の諸問題に即してのみ測られるのであり、そしてこれらの問題は、それ自体としてはすでに生存の文化的形式によって答えられている。
- 文中の「生の維持」とは、もちろんのこと種の保存という単なる生物学的意味で理解されてはならない。ハーバーマス自身がそれを生存の文化的形式と言い直しているように、認識関心が錨を下ろしているのは、人間の社会史的生存へと集約されている生活実践のただ中である。
[C] 文化的形式の過大評価: 単なる生物学的意味というところに意識の低さが露呈している。□
- 105 何が科学的事実であるのかを確定理論的枠組みでありするのはが科学的事実であるのかを確定するのは理論的枠組みであり、さらにその理論形成を先導するのが認識関心であるすれば、われわれはもはや「自然というテキスト」が認識関心から独立にアприオリに構造化された即自的存在であるという客観主義的想定あるいは科学的实在論の前提をそのまま受け入れることはできないであろう。むしろ、自然というテキストは認識関心に促されて分節化を遂げる「可能的構造体」なのである。
しかし、こう言ったからといって、読者が一方的にテキストを超越的視点から随意に読解しうるわけではない。認識関心が生活実践に根を下ろしているように、読者はすでに自然という

テキストのただ中に生きているのであり、認識関心とは読者とテキストとの間の還元不可能な相互作用そのものの別名にほかならない。

認識関心もまた解釈共同体の一員としての資格でテキストに向き合うのであり、認識関心も間主観的拘束性という意味で理解されなくてはならない。[C] テキストという傍観者の態度は根本的にここに書いてある考えの欠陥をあらわにする。われわれはそのテキストの中に生きているのだといいながらすぐ間主観的拘束の話が出る。□

106 解釈共同体ないしは科学者共同体を一つの共同体たらしめているものは、村政陰萎依る「言語」および「概念枠」の共有であろう。

解釈共同体の持つ規範的拘束力「可能的経験の制約」と「可能的論証の制約」という二つの問題場面に関わっている。この二つの制約=a priori 画家学の理論によって限定されている理論は、論証の諸条件の下においてのみならず同時に、経験可能な事象に対して先立って行われる客体化の限界内でのみ、形成されるのあり、また形成されていくのである。

107 この経験のアプリオリはわれわれの生活世界における対象的经验を構造化し、客観化する条件であり、他方で論証のアプリオリとは、理論形成の間主観的妥当性を保証する条件にほかならない。

118 醜いアヒルのこの原理—分類のためには重みづけが要る。

122 言語は「構造的安定性」を一面では制度化し、他面では再分節化するという形でそれを力動的に再編成する機能を持っている。再分節化は生活実践の自然性に根ざした再分節化ではある。

言語による制度化と再分節かの働きによって、この構造的安定性は生活世界を分節化する「分類整序体系」とでも言うべきものを形作る。そしてこの分類整序体系は、その中=で生きるわれわれの世界経験を可能にするという意味でまさに「超越論的」であり、また個々人の経験に先立って作動しているという意味でアプリオリなものである。

123 生活世界の分類整序体系はいわゆる通約不可能性のテーゼに対する一つの歯止めとなり得るであろうし、フッサールが生活世界を一切の科学の意味基底として捉えたことの意味も、この点にこそ求めることができるのであろう。

124 われわれの経験を根底において制約する生活世界のアプリオリは自然性に根拠をおいた歴史的生成の所産である、それは歴史の一回性という聖なる刻印を帯びた知の足枷だと言わねばならない。言いかえれば、生活世界のアプリオリはそのつど歴史的・具体的でありつつも、一切の経験を構造的に制約するという意味で、知的活動の普遍的な意味基底を形作る、作動しつつある開かれたアプリオリなのである。

[C] Saussure の Langue のようなものであるといたいらしい。□

127 概念枠が問題になるのは知的認識の次元ではなく、生活世界の分節様式を基礎にして形成される理論的認識の次元である。

「概念枠」はクーン流の理論的パラダイムと言い直してよい。それは、理論の間主観的妥当性

を拘束するという意味で論証のアプリオリをなすのであるが、ここで論証と行く言葉は論理的推論という狭い意味にだけ解されてはならない。その内容を規定するのは難しいが、研究対象の選択、モデルの設定方法、測定基準の採用、数量化の手続き、推論の方法、理論の妥当性の基準、などなどが含まれる。恣意理論的パラダイムは「何をいかに探究すべきか」を規制する、科学者共同体の共同規範だと言ってよいであろう。

言いかえれば、概念枠とは自然というテキストの「解釈手続き」にほかならない。

[C] 解釈という言葉が示すようにそこには行動へのつながり、その結果によって痛い目にあうという側面が閑却されている。□

130 あらゆる概念枠を中立的に俯瞰しうるような超越的立場に立つことは不可能である。

この隘路をひらく鍵は、ある論証様式に内容を理解することとその論証様式にコミットし、それを自らの行為規範として積極的に選びとることとをくべつすることである。

[C] 自然科学者はあることを事実と認定すると言うことはコミットすることである。□

131 生活世界の分節化の構造的安定性こそが自然というテキストの同一性を保証している。したがって論証様式とは自然という同一のテキストの多様な解釈と手続きになぞらえられる。

137 科学的真理は自然という書物の中にあらかじめ存在するものではなく、テキストと解釈者(科学者)との絶えざる相互作用を通じてその間に出現し、生成してくるものなのである。

M. ダメットの言葉を借りれば「すでに存在しているのではないが、言うならばわれわれが探りを入れると存在してくる数学的存在」⁶という表現を科学的実在に対しても転用できる。こうしてはじめて「われわれは主観的観念論に陥ることなしに、實在論を捨てることができる」⁷

146 通約不可能性が語られるいくつかの場面を区別しておこう:

(1) パラダイム点間を動機づけ、それを説明する合理的基準の不在。

(2) 新旧パラダイム間の「包摂モデル」による説明の否定。

(3) 異なるパラダイム間における理解不可能性。

147 ニュートン力学と現代物理学とでは時間、空間などの根本概念移管する前提的理解が決定的に異なっている。それゆえ極限としてあらわれる古典力学はそもそもの古典力学ではなく擬似古典力学である。包摂モデルではない。

[C] 物理学者のとらえ方は違うのではないか。式は書いた人より偉い、というところに人文系に理解できない話がある。我々は解釈を問題にしてない。そこが分からない人間のみ普通の言葉を使いたがる。□

198 ラベッツ「批判的科学」

「最近「科学」を絶対的に望ましきもの、永久不変の真理の追究ととらえる理想像はひどく曇らされ、社会的倫理的な数々の問題が、あらゆる方向から積み上げられて生きた」

[C] 科学の初心に戻るということが重要なのである。もちろん無条件に望ましいものとは言えない

⁶M. Dummett, *Truth and other enigmas* (Harvard UP 1978) p18.

⁷Ibid p19

が、しかし数学が人間理性の上限つまり deductive capability の上限であることに対応して科学は inductive capability の上限である。□

201

霧箱写真は理論を離れた「事実」としては、単に筋目の写った印画紙に過ぎず、物理学者はそれを「素粒子の飛跡」と解釈することによってはじめて実験的証拠を手に入れるのである。この事実は理論などと無関係ではありえない。これに対して「知識とは独立に存在する」「事実」はカントの「物自体」を指している理解せざるを得ない。これは形而上学的立場の表明にほかならない。